

チャペルニュース

2014年6月29日

弱さを抱いて

司祭 バルナバ 関 正勝

日本の高齢化率が25パーセント、すなわち総人口の1/4が高齢者になり「超高齢化社会」となった、と言われます。わたし自身も「後期高齢者」の入り口に立ちました。あるところではわたしは「若い」について話し合う機会がありました。「健康」に老いを生きる」と、望むべくもない主題でした。「出来る」と言う能力や「(いろいろな種類の)持ち物を持っている」ことが、その人を価値づけていくことが、その社会にあっては、生産性や自立していることこそが成功者とされがちです。若い存在にもそのような価値が突きつけられて生きづらさを実感させられます。健康にしても生産性と自立に直結する、所謂五体満足の状態としての健康観が力をもっています。これは強さの主張に他なりません。自立に名を借りた弱さや障がいの排除です。一人の介護されるだけの高齢者が、

介護する若者に「有難う」としか言えない、わたしの辛さがわかりますか？と告げました。生産性と自立から遠ざけられた人は、このような窮境にたたされています。

「有難う」と言う言葉は、わたしたちにとつて極めて大切な表現であるにも拘わらず、自立していないで何も出来ないでいる自分に負い目・引け目を感じないでは言えない言葉に能力社会は人を追いやっているように思いました。ヘルマン・ホイヴェルスの『人生の秋に』は弱さに祝福を謳います。弱さは他者を、そしてその助けを受け入れて生きる道の祝福を教えてください。健康とは実に失われ行く現実を受け入れることの出来る態度の強靱さであることを知らされます。

「この世で最上のわざは何？、楽しい心で年をとり働きたいけど休み・・・失望しそうなときに希望し従順に、平静に、おのれの十字架をになう若者が元気いっぱい神の道をあゆむのを見てもねたまず人のために働くよりも、けんきよに人の

世話になり、弱って、もはや人のために役たずとも、親切で柔和であること。」老いの重荷は神の賜物。・・・おのれをこの世につなぐくさを少しづつはずしていくのは、真にえらい仕事。・・・神は最後にいちばんよい仕事を残してください。それは祈りだ。一 手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。愛するすべての人のうえに、神の恵みを求めるために。・・・」